

有馬頼義の階層の変化と戦争体験

Hierarchical changes and war experiences on Arima yorichika

星 鉄雲*

はじめに

本稿の目的は、有馬頼義（1918～1980）の生い立ちから小説家になるまでの戦前から戦後を概観しながら、有馬頼義の戦争体験と戦後との結びつきとともに、戦争体験を語る思想を解明することである。

戦争体験者が自らの体験を語ることは珍しいものではない。だが、有馬のライフコースにはいくつかの特徴的な事柄、階層の変化がある。有馬は伯爵家の生まれでありながら、幼少期から少年期を親元から離れて暮らしていた。成蹊学園高等学校や早稲田大学に進学するが、教育機関から「放校処分」を言い渡され、兵役免除の特権を失い、1940年に陸軍に入隊し、1943年まで中国大陸で戦場を経験している。有馬は軍隊を経験することで、兵士という個ではなく、戦争や軍隊といった社会や組織などに対して反感を持つようになる。

終戦後、父・有馬頼寧が巣鴨拘置所に投獄され、頼義は無一文となるが、父の財産である家や土地は頼寧の権利であるとして、手放さないように努めている。頼義は頼寧や家系の特権階級から逃れようともがく反面、戦後は一時的に、それらを手放さないように努力し、そして自らの手で頼寧を裁こうとしていた。

さらに言えば、有馬は二・二六事件の目撃者でもあった。二・二六事件が

* 社会学研究科博士後期課程

「革命」と評されてきたことに対して、被害者の縁戚である有馬は「ただの人殺し」と評し、加害者遺族を含む論争を巻き起こしている。

有馬は特権階級に生まれながら、教育機関を放校処分となり、兵役に就くなど、階層を上から下へと移動していたといえる。階層の変化とともに戦前・戦中に軍隊や兵士などを経験した有馬は、軍隊や兵士をどう見ていたのだろうか、そして戦後の戦争認識にどのように影響したのだろうか。

上記の問を念頭に、有馬頼義の生い立ちから小説家になるまでの戦前から戦後を概観しながら、「落伍者」の「戦争の記憶」が形成されるプロセスと戦後との結びつきについて検討する。

先行研究整理

有馬頼義に関する先行研究では、作品の表象分析や作品のジャンルにおける位置づけなどに焦点が当てられてきた¹⁾。なかでも、有馬の作品において、なぜ戦争とミステリーが結びつけられたのかを研究した林博親「戦争とミステリー」では、有馬は日本の軍隊の持つ不可解な体質の摘発として「戦争ミステリー」を書いており、犯罪捜査をする推理小説らしさを裏切り、「戦争に抗い『価値ある死』を発見しようとする」ほどの余裕はなかったと指摘している²⁾。林の研究は20世紀における「戦争とミステリー」を結びつけた有馬頼義の作品を扱っており、戦争の記憶が遠のくにつれて、有馬の戦争ミステリーは作品のテーマを読者と共有しにくくなったと分析している³⁾。

有馬の作品における表象研究として李建志「『兵隊やくざ』論序説」が挙げられる。李は有馬の『貴三郎一代』を原作とした映画「兵隊やくざ」における戦中の中国表象を抽出し、日本の中国表象は中国の東北部の漢民族に重点が置かれ、南部の少数民族地域が希薄であると指摘している⁴⁾。

小説のジャンルとの結びつきや国や地域における有馬作品の表象研究は、それぞれが戦争と結びついている。しかし、有馬頼義自身の戦争体験がそれ

らの作品にどのように影響を与えていたのかは研究されてきていない。有馬自身、伯爵家の出でありながら、高等教育機関を放校処分となり、兵役に就くこととなった。有馬頼義のライフコースを研究することで、これまで見落としてきた有馬の戦争観と戦後に語る戦争体験との結びつきを示すことができる。

また、本研究は空襲記録運動を語るうえでも欠かせない。空襲記録運動研究は、地域の運動の成り立ちや運動の内容、変遷が主な研究対象であった⁵⁾。鈴木裕貴の「『基地の街』の空襲記録運動」は、佐世保市の戦後の歩みとともに、佐世保の記録運動をけん引した会社員の徳永辰雄や教員の新貝武史などと佐世保特有の社会背景との展開を指摘している⁶⁾。より運動に携わった人々に焦点を当てているのが、石橋星志の「『東京空襲を記録する会』の成り立ちと活動」である⁷⁾。石橋は鬼嶋淳の「記録する会の活動経緯やメンバーごとの状況と当時の社会の関係」を整理するという課題のもと、戦災誌編纂に携わった編集の詳細やスタッフ等に着目して分析している。運動に参画した知識人や文化人のかかわりや成果は運動の一部とみなされてきた。知識人や文化人に焦点を当てることで、運動の結びつきと成果から、知識人と文化人がどのような影響を運動に与えたのかを解き明かすことができる。

有馬もまた空襲記録運動を主導した中心人物の一人であることを考えれば、有馬のライスコースと戦争をめぐる思想と記憶を検討することから、空襲記録運動を支えた重要な力学（のひとつ）を解明することができるだろう。

本稿は以上の問いを念頭に、有馬頼義に着目しながら、戦中期の「落伍者」のライフコースから戦後いかなる戦争の記憶・思想・運動が生み出されたのかを考察する。

1章 貴族の反抗

本章では、はじめに有馬頼義のライフコースと階層の変化を整理する。ま

た戦後、1954年に刊行し、直木賞を受賞した『終身未決囚』が巻き起こすモデル論争から、なぜ有馬頼義は戦争体験を書くのか、書くことの意義は何かを考察する。

1 節 奔放・放校・徴兵

有馬頼義は、1918年2月14日、東京都青山北町六丁目に有馬頼寧・貞子の三男として生まれ、長男・頼秋とは15歳も年が離れていた。

頼寧は旧筑後国久留米藩主の15代目当主で伯爵の地位にあった。農政学者から近衛内閣の農林大臣、戦後の競馬界の発展に寄与した。母貞子は北白川宮久能王と岩波稲子の第二王女であり、皇族の身分を有していた。

頼義は幼少期に神奈川県酒匂町の東海道の松並木から海沿いにある「松濤園」という旅館で戸建てを借りて、親とは離れて老女（教育係）水野と暮していた。また、頼寧が帝大農学部の技術屋として買った荻窪の1万5千坪の田んぼや畑、なりものの木が植えてある敷地の片隅に4間の家があった。酒匂町の海岸沿いでは松葉を拾い互いに引っ張ったり、荻窪ではトンボやセミ、メダカを取ったり、畦道を歩いたり、自分の家の敷地のなかだけで日が暮れるまで遊ぶ奔放さを持っていた。

1924年に頼義は四谷の学習院初等科に入学した⁸⁾。そのまま中等科に進学できると考えていたが、1929年に突如、私立の旧制7年制の成蹊学園尋常科への進学が打ち出されたのである。頼義自身、成蹊に進学することは考えていなかった。しかし、頼寧は、自分の子どもを温室育ちにしないで、私立の「雑草教育の中へ投げ出す決心」を早くからしていた⁹⁾。1930年成蹊学園高等学校尋常科に入学したが、入試のための勉強で勉強嫌いとなり、部活動や農業に精を出した。成蹊学園に入学後、頼義は小説を書き始める。頼義が小説を書き始めるきっかけとなったのは、1933年頃に興味を持った宝塚少女歌劇へと綴ったファンレターからであった¹⁰⁾。一方で、野球にも熱を入れ、エースとして活躍していた頼義は、学校をさぼり、留年したこと

もあり、1935年に成蹊学園を「放校処分」となった。

1936年2月26日に青年将校らによるクーデター「二・二六事件」で姉静子が嫁いだ斎藤齋の父斎藤實が殺されたのを目撃する。

成蹊学園を去った後、頼義は1937年に早稲田第一高等学院に転校している。頼義が早稲田を選んだのは「当時の早稲田は、文学者を多く輩出しており、およそ小説をかく人間は、一度は早稲田に籍を置かなければ軽蔑される風潮があった」と書いている¹¹⁾。同年9月に戦前の最初の小説集『崩壊』を刊行し、頼義は「その時点から文学の道へはいったのだ」と小説家の道を歩み始めたことを実感していた¹²⁾。早稲田入学後、野球から一時的に手をひき、文学の道を志し、片岡鉄平の知遇を得ていた。しかし、日中戦争の勃発と時を同じくして、学業よりも軍事教練の時間が多くなっていた時代でもあった。頼義は、文学を勉強するために入学した大学で1日の半分を軍事教練に費やされることを拒み続けた。そのため、学生課から呼び出しを受け、坊主にして軍事教練に出席しろと命じられたが、出席するものの坊主にはしなかった。

頼義は「権力に押しつぶされることに屈辱を感じた」ため、髪を刈らなかつたが、大学側から頼寧宛に「髪を斬ればよし。斬らなければ退学届けを出せ。それもやらなければ、もっとも不名誉な『放校処分』とする」と通達された¹³⁾。頼義は「父を説得して、一番不名誉な放校処分を受けることにした。それで少しは自分の面子も立ったような気がしていた。父はあきらめた」と書いている¹⁴⁾。

成蹊学園でも「放校処分」となったが、早稲田での「放校処分」は徴兵延期がなくなり、旧幹部候補生となるための学校教練の検定合格証も発行してもらえないといった不利益が存在した。しかし、頼義は放校処分を受け入れ、早稲田を去ったのである。

頼義は早稲田を放校処分となる前に、北支や満州を旅している。杉山元陸軍大臣に名刺をもらい、軍隊のどこでも泊まれるようになっていた¹⁵⁾。日中

戦争の最中に中国に足を運び、一流ホテルに泊まり、日本軍の支援のもと、中国をめぐることができたのである。

1939年8月に日本橋区役所で徴兵検査を受け甲種合格となり、1940年1月5日に歩兵第一連隊に入隊し、麻布の東部二部隊に入営した。兵役前に中国に渡った方法と同様に下関の門司港から渡満したのである。その後、1943年に満期除隊帰国し、妻千代子と経堂に移って生活しながら、同盟通信社社会部に入社した。1944年の秋に通信社を退職し、隣組長、防空群長となり、1945年3月10日や4月・5月の空襲を体験し、終戦を迎えるのであった。

戦後、有馬頼寧が戦犯として巣鴨拘置所に投獄され、有馬家は財産を差し押さえられ、無一文となった。そのため、頼義は古物商やガラス拭き、ダンスホールやバンドの仕事などで生計を立てた時期があった。頼寧の建物や土地を売却せずに残し、自らの力のみで生き延びようとした頼義にとって戦後最初の父頼寧と階級への反抗であった。

2節 戦争責任とモデル

有馬頼義は頼寧や家系の特権階級から逃れようともがく反面、戦後は一時的にはあるが、それらを手放さないように努力し、そして自らの手で頼寧を裁こうとしていた。それが戦後の最初の作品である『終身未決囚』であった。

『終身未決囚』は1954年に刊行され、9篇の短編で構成されており、その1篇が戦後の東京裁判をモデルとした「終身未決囚」である。戦後の占領期間に「指導者責任観」が形成されることによって「一億総懺悔論」が否定され、東京裁判を受容する思想的土壌が形成されていった。頼義によって書かれた「終身未決囚」は、主人公・宮原基の行動が東京裁判で裁かれた大川周明をモデルにしている描写があることから、批判がなされた。

政治評論家である津久井龍雄は「大川氏とわかる宮原に関するその他の記述は一部事実と異っておりその異った事実を基として此の一篇の小説は構

成されている」と指摘している¹⁶⁾。さらに「終身未決囚」の主人公・宮原基が巢鴨拘置所に入所し、裁判を受け、法廷で將軍の禿頭を叩き、病院に入れられ「発狂」したということが大川周明の「名誉を毀損し、尊敬する人々の心情を不快にし（さらに国際的に日本人の不名誉をバクロし）」たと批判している¹⁷⁾。

津久井をはじめとする読者は大川周明が東京裁判の法廷で將軍の頭を叩いた場面から、宮原基に大川周明を投影したといえる。しかし、有馬は大川の行為を小説に書く上で、「断りがき」をしたとしても、「東京裁判の法廷で將軍の頭を叩いたのは、とも角大川氏一人に違いなく、あの場面に関する限り、それが大川氏とは何ら関係もない作者の創作であるとは言い得ないからです。（中略）あの場面は、現実到大川氏の行為をうつしたものであつても、あの小説のモデルが大川氏だという点については、私は全く違った考えを持っているということです」と反論している¹⁸⁾。有馬が「終身未決囚」に描き出そうとしているのは、東京裁判で裁かれた大川周明ではなかったのである。では、有馬は誰を描き出そうと試みているのだろうか。有馬は津久井に対する私信のなかで次のように語っている。

戦勝国ではなしに、何か、我々を裁く者がある筈だ。私は神を信じませんが、若しそれがあるとすれば、我々自身の中にある筈だと思つたのです。それを書くためにあの小説を書いたのです。法廷に於いて大川氏が演じたことは、大川氏個人の行為ではなく、日本人全体の象徴なのだ、という風に考えました。勿論、ですから作品の中の宮原基は、私の父でもあり、私自身でもあり、日本人全部でもあるという考えに立っています。¹⁹⁾

有馬が描き出していたのは、大川周明ではなく、「日本人全体の象徴」として「終身未決囚」を書いたのである。有馬は、事実通り大川周明を書いたな

らば、名誉を傷つけなかったと考えているわけでもないし、「終身未決囚」が大川の名誉を傷つけたとも考えていない。有馬にとっては、「私はただ大川氏の法廷に於ける行為から、象徴的に一人の日本人を仮設し、その人物の運命に於て、日本の立場と、不満と、そして同時に神への服従をえがいたつもりです」と「象徴的に一人の日本人」を作り出し、日本人全体が罪を背負う姿勢を描き出しているのである²⁰⁾。

有馬は占領時に形成される「指導者責任観」による戦争指導者に対する裁きと「一億総懺悔論」の国民一人一人の戦争責任を「終身未決囚」の宮原基に投影しているといえる。他8篇が収録された『終身未決囚』は、戦中から戦後にかけて、戦争と切り離せない物語で構成されている。これらの作品を書く意義を有馬は見つめ直している。

人間そのものよりも、人間の置かれた環境の中に、書かなければならないものを感じて書いた。いかりが作品の支えになっている。私の内部にはいつもそういうものが播居している。そういう文学のあり方が認められるかどうか、私自身ではわからない。²¹⁾

この「いかり」は戦争指導者であった頼寧に対してでもあり、有馬自身に対しても向けられていた。有馬は頼寧を批判することで、自らの責任を問い、自己発見をしてきたのである²²⁾。

「終身未決囚」は、有馬頼義が宮原基を通じた頼義自身であり、有馬頼寧や大川周明であり、日本人全体を「象徴」として描き出し、戦中の「いかり」を戦勝国ではない誰かに裁かれる意識として書いたのである。

3 節 直木賞の受賞と思想の連綿

津久井のモデル論争前に『終身未決囚』は、1954年7月22日の第31回芥川賞と直木賞と同時期に選考され、吉行淳之介の『驟雨』（新潮社、1954

年)が芥川賞を受賞し、有馬頼義の『終身未決囚』が直木賞を受賞した。直木賞の受賞は、新聞でも報じられ『毎日新聞』の「時の人 毛並みのいい両新人」では、「昔は私小説をよく書いたが、戦後は社会的なものに移り、社会問題を取り上げて描くようにつとめている」と記されている²³⁾。

『終身未決囚』執筆後、有馬は推理小説家として活躍し、松本清張と並び称される時期もあった。推理小説でも戦争とは切り離せず、戦争とミステリーを結びつけた推理小説を書いていた。これまで私小説を書いてきた有馬が推理小説を書きはじめたのは、『終身未決囚』が原因であった。有馬が直木賞受賞後、「今日でも、時折り、父や、母や、二人をとりまく人たちのことを嘘いつわりなく書いてきているから、当時の父の心の中で、これは弱ったことになった、何を書かれるかわからないぞ、という半分迷惑な気持ちもあったらと思う。だから、それから5年ほどの間、僕は身内の人のことを書かないでいた、それが書けないので、推理小説を、あのこと書いたのである」と回想している²⁴⁾。

しかし、有馬の戦争や軍隊への「いかり」は、推理小説にも関わらず、従軍体験や戦争が背景として描かれることで作品の根底に連綿と引き継がれていった。大伴秀司は有馬の小説に関して「必ず戦争の影がみえる。どんな人物を描いても、本能的に、戦争と結びつくのだ」と指摘している²⁵⁾。戦後の有馬の作品には戦争が見え隠れするのは、「いかり」がそこに映し出され、戦争を支えている大きな組織や体制、環境などにぶついているからであった。

本章では、有馬頼義のライフコースから戦後最初の作品である『終身未決囚』の刊行と論争までを概観してきた。有馬は自身が属する階級に反抗するために、頼寧とは別の道を歩むべく、小説家となり、兵士となり、貴族階級から、父から、家系から離れようと試みていた²⁶⁾。頼寧や階層から離れようとする反面、それらを批判することで有馬自身への問題意識へと移り変わったのである。「終身未決囚」で描き出されたのは、有馬頼義自身であり、日

本人全体として階層を隔てることなく「裁き／裁かれる」対象であった。「人間の置かれた環境」に対しての「いかり」は、戦中を覆い尽くし、戦後へと結びついていくのである。

次章では、人が置かれた環境への「いかり」が有馬の体験を語る基盤として補強されていく事例として、目撃者として体験した「二・二六事件」を取り上げ、戦後どのような議論を巻き起こすのかを見ていきたい。

2章 二・二六事件の回顧

本章では、有馬頼義が目撃した二・二六事件と利根川裕への批判から巻き起こる議論とともに、なぜ有馬が1960年代前後に二・二六事件について語り始めるのかを考察する。

1節 目撃者の体験

はじめに、有馬頼義が見た二・二六事件の概略を見ておきたい。有馬は戦後に二・二六事件の体験者に話を聞き、資料を集め、1970年に『二・二六暗殺の目撃者』（読売新聞社、1970年）を上梓している。刊行以前に新聞への投書が議論の下火を作っていた。本節では、有馬が記した自身の二・二六事件の概略を追うとともに、有馬にとって二・二六事件とは何であったのかを読み解いていく。

1936年2月25日に有馬頼義は、姉静子が嫁いだ斎藤實の養子・斎藤齊の夫婦とともに菅原の霧ヶ峰スキー場から上野に戻り、四谷の斎藤實の邸宅の向かいにある義兄夫婦の家に泊ることとなった。

26日未明、銃声で目を覚ました斎藤夫妻と家人にたたき起こされた有馬は、夫妻と合流し、カーテンの隙間から斎藤実邸を眺め見ると雪の上で一個小隊が折敷で待機していた。斎藤邸から将校と一個分隊くらいの兵士が正面

玄関から出てくると、目的を果たしたことを報告し、粛々と引き上げていった。

一方で、斎藤斉は小野内大臣秘書官に電話をかけ、対応を指示していた。軍隊が引き上げるのを見て、静子と有馬青年は、斎藤邸の鉄の門を抜け、玉砂利を駆け、玄関を駆け付け、2階の實の寝室に向かった。そこには銃弾が撃ち込まれた斎藤實の死体がベッドの向こう側に倒れていたのである。斎藤實の妻春子は銃撃で重傷を負いながらも一命を取り留め、後に有馬に経緯を話したのである。

死体発見後、目撃者にすぎなかった有馬は、父頼寧に電話をかけ、事態を報告している。頼寧は、東京の主要な部分がことごとく占領されていること、病気で熱海の万平ホテルにいる兄と姉のことを心配していた。頼寧は、秘書官を走らせ現金600円を頼義に渡し、熱海まで届けるように指示をした。「今考えると馬鹿々々しい」と有馬も回想しているが、「途中でつかまれば、殺されるだろう」とも考えながら、平常な東京駅を通り過ぎ、何の妨害も受けず、熱海に着くことができたのである²⁷⁾。

青年将校のクーデターを目撃した有馬は、1957年の『小説公園』新年号から1958年5月号にかけて「山河ありき」を掲載している。『山河ありき』の主人公・対馬紀年として書いた小説を後に自身の実体験として、「私の推理小説論」に引用している²⁸⁾。

有馬にとって二・二六事件を語ることは、「この作品に関する限り、虚構は一行もなく、人物も実名で、いろいろな事情で何度も壁におつかり、苦しかったが、僕は、僕自身のはらわたを自分の手でつかみ出すことの苦痛によって、それに耐えた。この作品は僕のすべてであって、この作品を否定されることは、僕の実在を否定されることになるので、かりにどんな評価がなされても、単純に、或いは部分的に、僕はもはや傷つくことはないだろう」と書いている²⁹⁾。『山河ありき』は有馬の戦後から戦前・戦中・戦後を振り返り、整理した小説であった³⁰⁾。

有馬は実体験と小説を合わせた娯楽要素を含めた作品で体験を発信していた。部分的に自身の戦争体験を語る有馬ではあるが、史実として書いたのが二・二六事件を含む『山河ありき』であった。

2 節 議論と批判一人殺しか、革命か

二・二六事件を目撃した有馬頼義は、1967年に朝日新聞で「二・二六事件と私」を執筆し、「最近になって、どういう理由か知らないが、利根川裕君という新人の小説『宴』が持てはやされ、映画、演劇、テレビになって世辞を高めた。私は疑問を感じないわけにはゆかない」と疑問を呈している。

私は、二・二六事件は、革命などというようなものではなく、ただの人殺しか強盗・強姦のたぐいだと思っている。その人殺し事件を利根川君の『宴』のように、まるで昭和史の最も象徴的な革命であったかのように取扱ひ、かれらを英雄視し、何かのひょうしで、当時のことを何も知らない世代のかっさいをあび、金をもうけ、さらにまた今後も、そういう仕事を続けるといふ意見を発表し、これが昭和史だとか、文学だとかいってふんぞりかえっているのが私には許せない。二・二六事件のけっ起将校と同じような思いあがり、私は利根川君の中に見るのである。³¹⁾

有馬が「ただの人殺しか強盗・強姦のたぐい」と表しているのは、実際に41発の凶弾が撃ち込まれた斎藤實の死体を目の当たりにし、自身も襲撃される可能性があったからだといえる。斎藤だけでなく、高橋是清が撃たれた上に日本刀で切られた惨殺さに「革命など問うものではなく、ただの人殺し」だと一蹴しているのである³²⁾。

この記事が火種となり、二・二六事件が「人殺し」か「革命」かという議論が巻き起こる。有馬の投稿に対して、仏心会（二・二六事件処刑遺族の会）の会長であり、河野寿元大尉の実兄である河野司は同年3月3日に「二・

二六事件の意味－有馬頼義氏への反論」を掲載している³³⁾。有馬が被害者の遺族であるのに対し、河野は加害者の遺族である。河野の立場は二・二六事件を全面的に肯定するわけでも、批判をすべて拒否するわけでもないが、有馬に対して批判の筆を執るに至っている。

河野は、有馬の「二・二六事件と私」を引用しながら、反論を展開している。第1に、「ただの人殺し」という言葉に対して、事件の首謀者の1人である磯部浅一の『獄中遺書』を参考に、「間髪を入れずに討つ可き」であった政治事件の確信犯を「討つ」ことができなかつたと指摘している。また、陸軍将校を裁いた軍法会議も26日未明の殺人・放火の事実のみに犯罪事件を限定していることから、有馬と同じ「ただの人殺し」と断定していると軍法会議の性格を位置付けている。

第2に「二・二六事件は革命などというようなものではなく、ただの人殺しか強盗・強姦のたぐいだと思っている」という表現について指摘している。河野は「悪魔の意味をもつこのような言葉を使用しなくては自分の悲憤と願望を表現できない文筆家を軽蔑する」と有馬を批判している³⁴⁾。

河野は二・二六事件が批判されることを前提としつつも、有馬のような「肉親への悲劇という感情から」「悪魔のような意味をもつ」言葉を浴びせられる事件ではないと擁護している³⁵⁾。河野の反論は二・二六事件を終始「革命」と結びつけ、「思想」を前提とした陸軍将校を革命の敗退者として位置付けているのである。

有馬と河野の議論に竹山道雄が1967年3月15日に読売新聞に「二・二六の意味」を掲載している。竹山は二・二六事件の被害者の縁戚にあたる有馬頼義の「ただの人殺し」と加害者の肉親である河野司の思想を前提とした「死をもってあがなった革命の敗退」を並べて、「破廉恥罪かそれとも政治事件かという、論争である」と論争を図式化している³⁶⁾。朝日新聞での対立を示しながら竹山は、青年将校らの「討伐決定に日がかかったからとて、それをもって磯部浅一が主張するように、自分たちの行為が是認された証拠とす

ることはできないだろう」と河野の主張に反論している³⁷⁾。一方で、「あの蹶起は、たしかにただの強盗殺人ではなく、信念にもとづく革命行為だった」と有馬の主張にも反論しているのである³⁸⁾。竹山は、「浅薄な動機」と「誠実な心情」の視点を否定しつつも、二・二六事件を破廉恥行為でも、国士でもない「浅薄で誠実な破壊行為」と位置付けているのである。

被害者遺族と加害者遺族の議論が紙面上で繰り広げられ、飛び火していたことが伺える。戦後、二・二六事件は青年将校の「純粹さ」や舞台背景の物語として機能してきた。しかし、被害者遺族である有馬にとって二・二六事件とは「人殺し」であり、「革命」ではなかったのである。有馬の巻き起こした議論は、紙面だけではなく、出版される『二・二六暗殺の目撃者』にまで影響を及ぼしていく。

3節 記録と反論

有馬が1970年に読売新聞社から上梓した『二・二六暗殺の目撃者』は1967年5月から7月にかけて10回にわたり『週刊新潮』に連載した内容が基となっている。有馬と新潮社の間では、連載当初から出版の約束があったが、連載後、出版は取りやめとなった。ついで、光文社と出版の話となり、連載文に加筆した原稿を渡したが、ご破算となっている³⁹⁾。

出版に辿りつくまでの過程で、有馬宅には脅迫状が60通ほど舞い込んだり、脅迫電話が鳴ったりしていた。どこの出版社も「二・二六」を口にすると手をひくため、八方ふさがりとなった有馬は、1970年3月6日に日本文芸家協会理事会で状況を説明し、同協会言論表現問題委員会が調査に乗り出したが、原因究明には至らなかった⁴⁰⁾。二・二六事件に関する出版ができないか、有馬は二・二六事件を書く意義を語っている。

事件以来埋もれていた被害者側の記録や記憶が、このまま消えてしまうのが昭和史の正当な評価の上で偏向を生じると考えて、“二・二六”を書

いた。たとえば私が立ち会った検視と裁判記録では斎藤実に撃ち込まれた弾丸の数から違っている。⁴¹⁾

有馬は、史実に対しての「正当な評価」をするために被害者側の記録や記憶を書き残そうとしていた。これまでの軍隊への「いかり」を基盤として、より事実とした記憶と記録の精査がなされているといえる。

一方で、匿名の読者からの脅迫状も多数寄せられていた。なかでも、「小官は貴卒をみそこなった。二・二六事件に対して単なるバクロ記事を載せるなどトップ屋と大差ないではないか」と投書されている⁴²⁾。「小官は貴卒をみそこなった」という言葉から軍関係者だと思われ、従軍体験のある有馬を批判する軍隊関係者も読者に数多くいたと推察できる。また、電話では「襲撃の行われた朝、お前が初年兵であったら、どうしたか」と問われ、もし4年早く1935年（昭和10）年に招集され、非常呼集がかかった場合、指令を拒めなかっただろうと回顧している⁴³⁾。有馬に寄せられた批判は、有馬を貴族と位置付けるのではなく、一兵士と位置づけ、有馬を批判していた。

有馬の記した「二・二六」に異を唱える河野司は、「事件の持つ意味について見解の相違は、いくら述べてもらってもよいのだが事実関係そのものが違うのは困る」と「事件の持つ意味」と「事実」とを切り話して論じている⁴⁴⁾。

紙面の議論のあと、出版された『二・二六暗殺の目撃者』は、「あとがき」に末松太平から「二・二六事件が人殺しではなく革命であったという趣旨のもの」の長文の反論を受けたと書いている⁴⁵⁾。末松は有馬の『二・二六暗殺の目撃者』に対して原稿を書いたが、有馬と河野の論争の渦中に飛び込んで、二・二六事件が革命であったか、殺人であったか「○×式」で「二・二六事件が人殺しではなく革命であったという趣旨のもの」を選択するようなことは指摘していないとしたうえで、二・二六事件の「事実」について誤りがあると批判している⁴⁶⁾。

末松と同じ紙面上に村上兵衛は「日本の反乱」として、蹶起将校たちの「しんの『敵』は誰であったか、明確な指摘することはなかなかむづかしいのである。そのアイマイさは、いかにも日本的であり、反乱そのものが日本的たらざるを得なかった。(中略)天皇の地位がひっくりかえらないかぎり、日本に革命が起ったとは言えない、という著者の考えは、案外正しいかもしれない」と記している⁴⁷⁾。村上は、「革命」や「クーデター」といった階層による権力奪取などのような議論ではなく、蹶起将校の敵の「アイマイさ」ゆえに「日本的」な反乱であったと二・二六を位置づけているのである。

本章では、有馬頼義と二・二六事件の目撃者として体験と巻き起こした議論を概観してきた。斎藤實が凶弾に倒れ、自身も襲われるかもしれないと危惧した有馬は、二・二六事件の被害者という立場から「ただの人殺し」という概念を生み出し、批判したことから、歴史の事実認識に関わる議論とともに、「人殺しか革命か」という思想の議論へと発展していった。有馬は被害の立場から記憶・記録することで史実として書き残そうとしていた。しかし、河野司は事件の持つ意味についての解釈の相違は認めるが、事実関係が違うのは困ると加害と被害の記録のずれを指摘していた。

直木賞を受賞した『終身未決囚』で書き記したように社会に対する「いかり」によって支えられてきた執筆から、「いかり」を基盤とした事実に基づく記憶と記録による精査へと変化していることが伺える。この被害の記憶・記録を書き残す作業と加害の視点の指摘がのちの空襲記録運動へと結びつくのである。

3章 空襲を記録する運動の知識人

本章では、1970年に立ち上がる東京空襲を記録する会の運動の創説者としての有馬頼義を概観する。戦争をモデルとした小説を書きながらも、自身の体験を小説の主人公に投影してきた有馬頼義がなぜ「空襲」の記録に参画

していったのかを考察する。

1 節 空襲と体験記

はじめに、有馬頼義における空襲体験とは何であったかを読み解いていく。有馬は1960年代中頃から『文藝春秋』で「アメリカ人は嫌い」や「終戦カボチャ」など、空襲と戦時中の体験を書き起こしている⁴⁸⁾。

有馬は、1943年の除隊後、内地に戻り、妻千代子と世田谷の経堂に移って生活をしていた。1944年の秋ごろに同盟通信社を退職し、隣組長、防空群長となり空襲の被害にあっている。「東京大空襲」と呼ばれる下町を中心とした空襲があった前日の3月9日の夜に、有馬は深川木場に住んでいた友人の結婚式に参列していた。3月10日未明からの空襲で、深川のあたりを逃げ、炎の中を、ときに水につかり、夜明け頃に白髭橋まで逃げたと体験を語っている⁴⁹⁾。有馬が歩いて経堂まで帰ったあとに千代子から投げかけられた言葉で戦時中の「非日常」を受けとめている。

「生きていたのね」と妻が言ったとき、僕もはじめて、あの時代の日常は、誰が何処で死んでいても、人は大して気にもしていなかったのだ、と気付いた。それはちょうど、兵士が銃に剣をつけて白兵にうつるとき、となりの仲間が弾丸に当たって死んでも、どうしようもないという風な状態に似ていた。残った妻も、一晩中、空襲にさらされていたのである。⁵⁰⁾

有馬は空襲を受ける時間の中では有馬自身のみとなり、同じ時間のなかで空襲にさらされていた妻のことまでも考えることができなかつたのである。

1964年に勃発したベトナム戦争の「北爆」に端を発し、日本における空襲被害とともに、米軍基地の兵站・出撃基地としての「加害責任」が同時期に問われ始めていた。従軍体験のある戦中派である有馬は、空襲も体験し、被害と加害の狭間に立っていたのである。小田実の「難死の思想」(文藝春

秋、1969年)で提示された「散華」のような死の崇高化、自己批判を欠いた自己肯定的な概念と「難死」という虫けらのような死、まったくの犬死という概念において、空襲は「難死」であった⁵¹⁾。しかし、「あの時代の日常は、誰が何処で死んでいても、人は大して気にもしていなかったのだ」というのであれば、有馬は兵士のときでさえも「難死」の立場にいたといえる。

有馬は二・二六事件の執筆と並行して、1960年代後半から空襲や銃後の体験を書きはじめる。では、有馬はどのように空襲を記録する運動へと参画していったのかを次節で見していきたい。

2 節 運動の創設—編纂路線と組織

1970年に「東京空襲を記録する会」が発足する。ベトナム戦争の北爆が日本の空襲と結びつき、空爆によって空襲が想起され、「記録のなさ」が、松浦総三や早乙女勝元らによって指摘され始めた⁵²⁾。同時期に朝日新聞では「東京被爆記」が1970年7月12日から8月18日、24日に掲載され、空襲への関心の高まりがあったと見てとれる。

東京空襲を記録する会は、東京都から助成金と公益財団法人という器を獲得することで、運動の運営基盤を作り上げていった。そのなかで、なぜ有馬頼義は空襲記録運動と結びついていったのだろうか。

有馬が運動に参画するのは、早乙女勝元が運動の発起人として声をかけたことがきっかけであった。早乙女は近衛内閣農相の父を持つ作家という都議とのバランスを考え、有馬頼義に「東京空襲を記録する会」の代表をしてもらおうと、1970年7月7日に都議会に寄った足で20年ぶりとなる有馬のもとを訪ねている。有馬は、早乙女から都知事への要望書を見せてもらい「東京大空襲の組織的な記録作りは、いま大事なことですよ。ほくで、できるだけのはします。いや、やります。きみ、よくきてくれた」と運動の先頭に立つことを約束したのである⁵³⁾。

では、なぜ有馬は、東京の会の代表を引き受けたのだろうか。空襲記録運

動の「記録する」ひとつの出発点は、1970年以前に出版されてきた空襲資料への疑念であった。被害の大きさや被害をもたらした敵機数など、日本の資料とアメリカの資料とでは差が大きく開いていた。そのため、有馬は「早乙女君が『東京都戦災誌』を完全に信用していないように、僕も、この文章の中で発表した、東部軍管区の記録を信用していない」と書いている⁵⁴⁾。しかし、その疑念は、資料の見落としだけでなく、実際に東京を空襲した機体と途中で引き返した機体、もしくは他の都市に爆撃に回った機体などを指摘し、「東京空襲の記録を正確に残すためには、日本の他の市の災害をも調べなければならない」とも有馬は記している⁵⁵⁾。東京という都市だけでなく、他に空襲の被害を受けた地域やアメリカの加害の視点から調べることで、より東京の空襲の被害を正確に記録しようと考えていた。

空襲記録運動は東京だけではなく、後に横浜や名古屋、大阪などへと拡大していく。有馬が示唆したように他の都市の空襲を記録する運動は、すでに動き始めていた。有馬は、「もし、日本の都市全部の資料がととのえば、今疑問になっている諸問題がとけるかも知れないし、この年の災害を記録する運動が、もっと広く各地で起れば、僕たちの仕事は、日本中の都市の運動の連合体として、さらに一步すすめるなければならないかもしれない」と地域の空襲記録運動だけでなく、1971年以降に開催される「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」という全国規模の運動をすでに構想していたと見てとれる⁵⁶⁾。

有馬が二・二六事件を執筆してきた被害の記憶と記録が、空襲記録運動にも引き継がれていった⁵⁷⁾。また、「空襲の記録のなさ」が「事実を正確に記録する」ことへの裏返しとして作用していたのである。

東京空襲を記録する会には、2つの戦災誌編纂の路線が見いだされていた。1つは、有馬が提唱する公益財団法人をつくり、東京都から経済的な援助・補助をもらい、東京の会が市民自らの手で編集する「有馬路線」である⁵⁸⁾。もう1つは、東京都の行政のなかに事務所をおいて東京都の職員が戦災誌を

作り、その編集会議に月1回顔を出す、「全部東京都に丸投げ方式」であった⁵⁹⁾。

早乙女は、「有馬さんが代表、松浦さんが事務局、ぼくは手伝いなんです、実をいうと、都にまかせた段階で手をひき、地味な作家業に戻るつもりでした」と東京都に丸投げ方式に賛成していた⁶⁰⁾。しかし、早乙女は作家業には戻れず「スケジュールもくずれて、いろいろ困るんですが、そうなれば、人間の意地みたいなもので…」というように、東京の会の手によって戦災誌を編んでいく方針が取られたのである⁶¹⁾。他にも歴史学者の高橋磯一や評論家の加太こうじ、教育家の石上正夫らが「有馬路線」を支持したことで、市民の手による戦災誌の編纂という方向に運動は舵を切った。

有馬が作り出した戦災誌の編纂における市民の手による路線は後に発足する地域の空襲記録運動にも引き継がれていく⁶²⁾。また、編纂の路線だけでなく、法人設立に伴い、事業は発起人が中心となり、発起人をもって評議員会を構成することと、理事会は外部からの支援を得るために評議員会から10人と各界から10人で構成することとなり、その人選が有馬に一任されたのである。

有馬は、理事会メンバーとして、出版関係で講談社の野間省一社長や文藝春秋の池島信平社長、東京出版販売の池辺伝会長、財団からはブリヂストン・タイヤの石橋幹一郎社長や西武百貨店の堤清二社長、空襲を体験している作家の徳川夢声などを招き入れ、評議員会とともに組織した。編纂事業の推進母体である評議員会と知名な方々の参加を経た理事会の両輪によって運動は組織・運営されると同時に東京都庁をはじめ、対外的信頼と事業への期待感、助成金を手に入れたのである⁶³⁾。

これほどまでに運動に尽力した有馬は著名人に声をかける一方で、各方面の親しい人たちに「私としては一世一代の仕事をする事になったので何卒ご声援とご協力をお願いしたい」という私信を発送していることから運動への決意をうかがい知ることができる⁶⁴⁾。

空襲記録運動に参画していった有馬頼義は、運動における戦災誌の編纂と組織の両輪を作り上げたのである。空襲においても被害の記憶と記録のため、有馬が二・二六事件で示したことが引き継がれてきた。では、有馬自身、空襲を語ることをどのように捉えていたのだろうか。

3節 語られる体験と集大成

東京空襲を記録する会発足後、有馬は1954年に直木賞と同時に発表された芥川賞を受賞した吉行淳之介と対談し、空襲について語っている。有馬は「ヒロシマ」を例に出しながら、「同じことを繰り返すなという意味」が戦争の持つ悲惨さや辛さの実感がなくなっていると示し、なぜ空襲を語りだすのかを吉行とともに議論している⁶⁵⁾。

空襲のことをしゃべりたくないという人もずいぶんいると思うんだ。戦後25年たって、なんか一種の地獄絵図みたいなものに対する興味が出てきたわけだな。われわれにとって空っていうのは爆弾が降ってくるものだったけど、だんだん平和がつづくにつれてふたがされ、そのふたをとってみたい気持ちができてきてるわけだな。しゃべりたくない気持ちには、それがいやだっていう気持ちがあるんじゃないかね。⁶⁶⁾

有馬や吉行にとっての「空」は雨や雪が降ってくるものではなく、「爆弾が降ってくるもの」だった。その体験に「ふた」がされ、その「ふた」を取ってしゃべりだす人々と「ふた」を取らずもしくは取られることへの拒否感があった。1960年代後半、戦争を「カッコいい」「イカス」と捉える若い世代に対して、戦争の悲惨さやつらさを再現することも戦災誌編纂の取り組みであった。

また、有馬は対談で下町の空襲で重要なことは、罹災した人が下町にいないことであると指摘している⁶⁷⁾。東京から北海道・九州まで疎開し、体験者

が東京にはいないことから、体験だけでなく、政府や行政資料、米軍資料により日本全国の都市を網羅することが示唆していた。

その後、東京空襲を記録する会が『東京大空襲・戦災誌』の編纂を開始して3年と半年の歳月を経て、1974年に最後の第5巻が発刊された。そして『東京大空襲・戦災誌』全5巻の完成に対して、貴重な記録として第22回菊池寛賞を受賞することとなったのである。

菊池賞を受賞したことを有馬は初め信じられず、そこまでの仕事をしたのかと疑っていた。しかし、仕事を振り返り、次第に1,000枚、1,000頁の記録集が形となったことを喜んでいる。

私の小説が何かの文学賞を受けたというのよりも、はるかに、嬉しさが、次第にこみ上げてきた。その半分は、手記を寄せて下さった方々に対する感謝の気持ちであり、この全集をともし角つくり上げるために、自分の仕事をなげうって力をかしてくれた編集委員や評議員への感謝であった。ともかく、私達は一つの仕事をなしとげたのだ。授賞のことをきいて、私はあの夜、手伝ってくれた仲間の一人に電話をかけた。授賞の話をしているうちに、私は何とも云えない感動に襲われて、泣いた。⁶⁸⁾

戦災誌編纂を市民の手による方針をとった有馬路線は、集大成を迎えたのである。有馬の活動・運動を支えていた「いかり」は継続していた。有馬は感謝をすると同時に、この運動は「いかりが深くなり、大きくなるにつれて、私たちの使命感も強くなった」と書いている⁶⁹⁾。寄せられた手記を編纂し、被害の事実を知ること、基盤である「いかり」が強く意識されていたのである。

本章では、空襲記録運動の発起人の一人として有馬頼義を取り上げた。東京空襲を記録する会は、有馬によって市民の手による戦災誌の編纂の方針を示し、理事会メンバーを集め、公益財団法人とすることで対外的な信頼を獲

得した。記録することの根底にあったのは、『終身未決囚』から連なる一貫した「いかり」であり、被害の記憶と記録が市民の記録運動へと結びついていったのである。

おわりに

本稿では、有馬頼義の生い立ちから戦争体験がいかに戦後の文学的な活動や運動を支える思想に絡み合っていくのか、階層が下降した体験者の思想と語りの基礎を戦後の作品の議論とともに分析してきた。

有馬頼義の戦争体験を基盤とした文学の活動や空襲記録運動の思想は、戦後の『終身未決囚』から形づくられていた。『終身未決囚』は、有馬頼義が宮原基を通じた頼義自身であり、有馬頼寧や大川周明であり、「日本人全体の象徴」として「裁き／裁かれる」対象を作りだした。戦前・戦中そして戦後へと連なる『山河ありき』では、有馬自身を主人公に投影することで自身の体験を振り返るとともに、有馬自身が「いかり」の対象であり、「裁き／裁かれる」対象であった。目撃者として体験した二・二六事件は青年将校らの軍隊という社会と事件を「革命」と呼ぶ社会を批判し、「ただの自殺」であったと被害の立場から記憶と記録の必要性を説きはじめた。

階層の意識は空襲の被害を受けた市民の手による記録運動へと広がりを見せいった。1971年8月14日に空襲記録運動の全国大会である「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」で、有馬は全国会議の代表に選出される⁷⁰⁾。空襲記録運動で活動する有馬は市民の代表であり、皇族や貴族などの階層から離れていったといえる。一方で、東京空襲を記録する会において有馬は、都議や財界と市民をつなぎ、市民の手による戦災誌の編纂を進める運動のひとつの力学であった。その後、有馬は1972年にガス吸引による自殺未遂を起こし、1970年代半ばから1980年に亡くなるまで、次第に姿を見せなくなっていく⁷¹⁾。

有馬頼義のライフコースは、高等教育機関の放校処分からはじまり、兵役に就き、高貴な身分から離れていった「落伍者」であった。しかし、有馬は、戦後「落伍」した体験を小説に描き出し、戦争や社会を批判し、「戦争の記憶」を形成していった。

戦争体験者として抱えてきた「いかり」は、戦後に戦争を背景とした小説に落とし込まれ、次第に史実として被害を記憶・記録することへとつながっていった。有馬は、推理小説のような「価値ある死」ではない、戦時中の「誰が何処で死んでもおかしくない死」と隣り合わせであった被害を書き続けることで、社会や環境、規律を常に批判し続けていたのである。有馬頼義だけでなく、「戦争の記憶」が形成される過程と戦後の結びつきを考察することは、戦後の戦争認識形成過程の解明にもつながるものであり、これらを今後の課題としたい。

注

- 1) 有馬頼義が書いた日記に対して文学的ないし文学史的意義のある『経堂日記』の現代語訳や若手文学者の集会「石の会」についてまとめた資料なども挙げられる。上坂高生『有馬頼義と丹羽文雄の周辺』武蔵野書房、1995年。佃實夫「五木寛之との出会い」『五木寛之の美学』講談社、1979年、5～33頁。西村洋子、浅倉洋子「文学者の戦中日記 有馬頼義『経堂日記』」『日本近代文学館年誌資料探案』第1巻、2005年、84～140頁。
- 2) 林廣親「戦争とミステリー」成蹊大学文学部学会編『ミステリーが生まれる』風間書房、2008年、144～147頁。
- 3) 同上、147頁
- 4) 李建志「『兵隊やくざ』論序説」『関西学院大学 先端社会研究所紀要 第11号』学校法人 関西学院大学先端社会研究所、2014年、27～46頁。
- 5) 池上大祐「福岡における空襲記録運動の系譜」『平和研究』45号、早稲田大学出版部、2015年、85～106頁。江山「鹿児島市における空襲記憶の記録と継承」『地域政策科学研究所』鹿児島大学、2020年、23～41頁。福島在行「空襲・戦災を記録する運動の始まりにあったもの—横浜の空襲を記録する会の初期の活動から—」『戦後社会運動史論②—高度成長期を中心に—』大月書店、2012年、209～238頁。など
- 6) 鈴木裕貴「『基地の街』の空襲記録運動—1970年代の佐世保に着目して」『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』第22号、立命館大学国際平和ミュージアム、立命館

- 平和研究編集委員会、2021年、51～71頁。
- 7) 石橋星志『『東京空襲を記録する会』の成り立ちと活動：『東京大空襲・戦災誌』編集を中心に』『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター、2020年、41～46頁。
 - 8) 1924年に長兄頼秋が赤痢で亡くなっている。頼寧は頼秋を軍隊に入隊させ後継ぎとして育てたかったのである。また、1946年に次兄頼春が栄養失調で亡くなっている。
 - 9) 有馬頼義『山の手暮色』講談社、1971年、93頁。
 - 10) 同上、144～145、152頁。
 - 11) 同上、166頁。
 - 12) 同上、145頁。
 - 13) 同上、173頁。
 - 14) 有馬頼義「母、その悲しみの生涯 - 半夏生 -」『別冊文藝春秋』第97号、文藝春秋、1966年、113頁。
 - 15) 前掲『山の手暮色』179頁。
 - 16) 津久井龍雄「明らかに大川氏がモデル」『出版ニュース』10月上旬号、出版ニュース社、1954年、2頁。
 - 17) 同上、2頁。
 - 18) 有馬頼義「象徴的な日本人を仮設」『出版ニュース』10月上旬号、出版ニュース社、1954年、4頁。
 - 19) 同上、4頁。
 - 20) 同上、4頁。
 - 21) 有馬頼義「後がき」『終身未決囚』作品社、1954年、267頁。
 - 22) 有馬は「父を責めることは、僕を責めることかもしれない。さように、僕にとって、父は無視することのできない存在であった。父が死ぬまで、結局僕は、父の存在の外には出られなかった」と書いている（有馬頼義『原点』毎日新聞社、1970年、209頁。）。
 - 23) 「時の人 毛並みのいい両新人」『毎日新聞』1954年7月22日、3頁。
 - 24) 前掲『原点』209頁。
 - 25) 大伴秀司「文学の山河をゆく」『現代推理作家シリーズ・4 有馬頼義』宝石社、1964年、262頁。有馬は「こんどの戦争を、みんなあまりに早く忘れすぎているのではないのでしょうか。みんな書くのをやめてしまったが、まだまだ書きつづける必要がある。せめて、僕ぐらいは、しつこく書こう。僕の小説は、なんらかのかたちで、みんな戦争につながっています」と有馬文学共通のテーマであった（大伴秀司「文学の山河をゆく」『現代推理作家シリーズ・4 有馬頼義』宝石社、1964年、262頁。）。
 - 26) 有馬頼義の息子の第16代目当主有馬頼央は、頼義を頼寧や家の伝統的なものを否定してきた反面教師として捉えている。そのため、頼央は頼義が否定してきたものを肯

- 定し、頼寧以前のことを継承できるように東京・日本橋にある水天宮の宮司を継いでいる（「連載 20 子孫が語る秘話と秘宝 大名家編有馬家第 16 代当主 有馬頼央氏」『週刊朝日』朝日新聞出版、2014 年、70 頁。）。
- 27) 有馬頼義『二・二六暗殺の目撃者』恒文社、1998 年、28-29 頁。
- 28) 有馬頼義「私の推理小説論」木々高太郎、有馬頼義『推理小説入門 一度は書いてみたい人のために』光文社、1960 年、15～20 頁。
- 29) 有馬頼義「あとがき」『山河ありき』中央公論社、1962 年、289 頁。
- 30) 有馬は、「戦後はまだ 26 年しかたっていない。（中略）人間個人に残された戦争体験は、彼にとって、その前の時期がどうであったか、またその後の時期がどうであったかが決まらないうちに、軽々しく決定するべきではない。少なくとも僕はまだ、未整理の状態といったほうが正しい。混沌としたままである。」と山河ありきを執筆して以降も戦争体験を整理しきれてはいなかった（有馬頼義「私のなかの陸軍」『文藝春秋臨時増刊「太平洋戦争 日本陸軍戦記」』文藝春秋、1971 年、58 頁。）。
- 31) 有馬頼義「二・二六事件と私」『朝日新聞』1967 年 2 月 25 日夕刊、9 頁。
- 32) 同上、9 頁。
- 33) 河野司「二・二六事件の意味 - 有馬頼義氏への反論」『朝日新聞』1967 年 3 月 3 日夕刊、7 頁。
- 34) 同上、7 頁。
- 35) 同上、7 頁。
- 36) 竹山道雄「東風西風 二・二六の意味」『読売新聞』1967 年 3 月 15 日夕刊、5 頁。
- 37) 同上、5 頁。
- 38) 同上、5 頁。
- 39) 「出版中止また疑惑 引き受けてなく三年」『読売新聞』1970 年 4 月 7 日、15 頁。
- 40) 同上、15 頁。
- 41) 同上、15 頁。『二・二六暗殺の目撃者』でも同様に「この文章は蹶起将校への反論として書いたのではなかった。事件以来 34 年間、埋れていた被害者側の記録や記憶が、このまま消えてしまうのが、昭和史を正当に評価する上で、変更を生じると考え、筆者がこの文章を書くことによって、幾つかの資料が世に出るであろうことを希望していたし、それには、ある程度成功したように思っている」とも書いている（有馬頼義『二・二六暗殺の目撃者』恒文社、1998 年、166 頁）。
- 42) 前掲『二・二六暗殺の目撃者』165 頁。
- 43) 同上、166～167 頁。
- 44) 前掲「出版中止また疑惑 引き受けてなく三年」15 頁。
- 45) 前掲『二・二六暗殺の目撃者』220 頁。
- 46) 末松太平「○×式は御免」『出版ニュース』9 月下旬号、出版ニュース社、1970 年、18 頁。

- 47) 村上兵衛「日本の反乱」『出版ニュース』9月下旬号、出版ニュース社、1970年、19頁。
- 48) 有馬頼義「アメリカ人は嫌い」『別冊文藝春秋』第92号、文藝春秋、1965年、307～320頁。有馬頼義「終戦カボチャ」『文藝春秋』8月号、文藝春秋、1967年、75～76頁。
- 49) 有馬頼義「東京大空襲 焦熱地獄からの証言」『文藝春秋』4月号、文藝春秋、1971年、269頁。
- 50) 同上、271頁。
- 51) 小田実「『難死』の思想」『『難死』の思想 岩波書店、2008年、3頁。道場親信「『難死』の思想と現代」藤原良雄『われわれの小田実』藤原書店、2013年、248～249頁。
- 52) 松浦総三「書かれざる東京大空襲」『文藝春秋』文藝春秋、1968年、146～156頁。
- 53) 「めぐりあい 東京大空襲の記録作りの原点」『毎日新聞』1982年1月20日夕刊、3頁。
- 54) 前掲「東京大空襲 焦熱地獄からの証言」274頁。
- 55) 同上、275頁。
- 56) 同上、275頁。
- 57) 二・二六事件で指摘された被害と加害の記憶や記録の「ずれ」は、空襲記録運動で加害の視点である米軍資料を紐解くことで引き継がれていく。
- 58) 有馬の記録運動路線は、市民自らの手で戦災誌を編むことであった。有馬は東京都からお金をもらって、自分たちの手で編むこと以外は意味がないと頑なに譲らなかつた（『東京大空襲・戦災誌』編集委員会『東京大空襲・戦災誌』第5巻、東京空襲を記録する会、1974年、1,036～1,037頁。）。
- 59) 同上『東京大空襲・戦災誌』第5巻、1,036～1,037頁。
- 60) 「ときの人」『毎日新聞』1970年8月12日、2頁。
- 61) 同上、2頁。
- 62) 鹿児島県の空襲を記録する会は、戦災誌・記録集の発行についての不平等を指摘している。「全国で刊行されたものを見ますと、新聞社が出版したもの、出版社が出版したものの、行政当局が出版したもの、民間の『記録する会』が出版したもの等、種々ありますが、中でも、目をひくのは、民間の「記録する会」に自治体行政当局が補助金・助成金を支出して、協力して充実した『記録集』を発行しているところがかかなりあることです。」「全国で広範な被害を受けた鹿児島県が、まっ先にしなければならなかつた事を他の『ところ』がどんどん実行しているのです。」（鹿児島県の空襲を記録する会『特攻基地 鹿児島県の空襲・戦災』、1984年、2～4頁。）
- 63) 前掲『東京大空襲・戦災誌』第5巻、1,034～1,035頁。
- 64) 同上、1,035頁。
- 65) 有馬頼義、吉行淳之介「対談 火の海を逃れて - 東京大空襲を語る -」『展望』5月号、

- 1971年、72頁。
- 66) 同上、72頁。
- 67) 同上、74頁。有馬は、場所の問題だけでなく、当時の戦争の悲惨さやつらさには、空襲という被害だけでなく、空襲警報の音で目が覚めるといった身近な不愉快さも隣り合わせであったと指摘している（同上有馬、吉行「対談 火の海を逃れて - 東京大空襲を語る -」73頁。）。
- 68) 有馬頼義「空襲記念館」『中央公論』1月特大号、中央公論社、1975年、276頁。
- 69) 同上、276頁。
- 70) 有馬にとって空襲記録運動は新しい考えではなく、自身の作品がこれまで戦争ものであったことから仕事の延長だと考えていた。（「正確な戦争体験をのこすため 私にとっては仕事の延長」『平和新聞』1971年9月5日、1頁。）。
- 71) 自殺しようとした有馬は、仕事や野球、接客、執筆、電話のベル、玄関のブザーに疲れ、「もう、そんなものが、何一つない世界へ行きたいと思った。行けるのか、-私はしかし、その時点で、はっきりと〈死〉を考えたわけではなかった」と書きながらも、「私を突き飛ばしたのは川端さんの事件であったと云えないことはない」と記述している（有馬頼義「自殺未遂前後」『中央公論』89巻6号、中央公論新社、1974年、178頁。）。

引用文献

- 有馬頼義「象徴的な一日本人を仮設」『出版ニュース』10月上旬号、出版ニュース社、1954年、4～5頁。
- 有馬頼義『終身未決囚』作品社、1954年。
- 有馬頼義「母、その悲しみの生涯 - 半夏生 -」『別冊文藝春秋』第97号、文藝春秋、1966年、74～153頁。
- 有馬頼義「私の推理小説論」木々高太郎、有馬頼義『推理小説入門・一度は書いてみたい人のために』光文社、1960年、7～26頁。
- 有馬頼義『山河ありき』中央公論社、1962年。
- 有馬頼義「アメリカ人は嫌い」『別冊文藝春秋』第92号、文藝春秋、1965年、307～320頁。
- 有馬頼義「終戦カポチャ」『文藝春秋』8月号、文藝春秋、1967年、75～76頁。
- 有馬頼義『原点』毎日新聞社、1970年。
- 有馬頼義『山の手暮色』講談社、1971年。
- 有馬頼義「東京大空襲・焦熱地獄からの証言」『文藝春秋』4月号、1971年、264～276頁。
- 有馬頼義「私のなかの陸軍」『文藝春秋臨時増刊「太平洋戦争 日本陸軍戦記」』文藝春秋、1971年、58頁。

- 有馬頼義「自殺未遂前後」『中央公論』89巻6号、中央公論新社、1974年、177～185頁。
- 有馬頼義、吉行淳之介「対談・火の海を逃れて－東京大空襲を語る－」『展望』5月号、1971年、71～84頁。
- 有馬頼義「空襲記念館」『中央公論』1月特大号、中央公論社、1975年、275～276頁。
- 有馬頼義『二・二六暗殺の目撃者』恒文社、1998年。
- 上坂高生『有馬頼義と丹羽文雄の周辺』武蔵野書房、1995年。
- 梅田昌志郎「解説」『背後の人』旺文社、1976年、211～227頁。
- 大伴秀司「文学の山河をゆく」『現代推理作家シリーズ・4・有馬頼義』宝石社、1964年、252～273頁。
- 小田実「『難死』の思想」『『難死』の思想』岩波書店、2008年、3頁。
- 末松太平「○×式は御免」『出版ニュース』9月下旬号、出版ニュース社、1970年、18～19頁。
- 津久井龍雄「明らかに大川氏がモデル」『出版ニュース』10月上旬号、出版ニュース社、1954年、1～3頁。
- 佃實夫「五木寛之との出会い」『五木寛之の美学』講談社、1979年、5～33頁。
- 『東京大空襲・戦災誌』編集委員会『東京大空襲・戦災誌』第5巻、東京空襲を記録する会、1974年、1,027～1,038頁。
- 西村洋子、浅倉洋子「文学者の戦中日記・有馬頼義『経堂日記』」『日本近代文学館年誌資料探索』第1巻、2005年、84～140頁。
- 間羊太郎「有馬頼義論」『現代推理作家シリーズ・4・有馬頼義』宝石社、1964年、236～249頁。
- 林廣親「戦争とミステリー」成蹊大学文学部学会編『ミステリーが生まれる』風間書房、2008年、129～157頁。
- 松浦総三「書かれざる東京大空襲」『文藝春秋』文藝春秋、1968年、146～156頁。
- 道場親信「『難死』の思想と現代」藤原良雄『われわれの小田実』藤原書店、2013年、248～249頁。
- 村上兵衛「日本的反乱」『出版ニュース』9月下旬号、出版ニュース社、1970年、18～19頁。
- 李建志「『兵隊やくざ』論序説」『関西学院大学・先端社会研究所紀要・第11号』学校法人 関西学院大学先端社会研究所、2014年、27～46頁。

新聞・雑誌記事

- 「時の人・毛並みのいい両新人」『毎日新聞』1954年7月22日、3頁。
- 有馬頼義「二・二六事件と私」『朝日新聞』1967年2月25日夕刊、9頁。
- 河野司「二・二六事件の意味－有馬頼義氏への反論」『朝日新聞』1967年3月3日夕刊、7頁。

- 竹山道雄「東風西風・二・二六の意味」『読売新聞』1967年3月15日夕刊、5頁。
- 「出版中止また疑惑・引き受けてなく三年」『読売新聞』1970年4月7日、15頁。
- 「めぐりあい・東京大空襲の記録作りの原点」『毎日新聞』1982年1月20日夕刊、3頁。
- 「ときの人」『毎日新聞』1970年8月12日、2頁。
- 「正確な戦争体験をのこすため・私にとっては仕事の延長」『平和新聞』1971年9月5日、1頁。
- 「連載20・子孫が語る秘話と秘宝・大名家編有馬家第16代当主・有馬頼央氏」『週刊朝日』朝日新聞出版、2014年、70頁。